

西鶴：二葉集の場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1987-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1566

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



西鶴——二葉集の場合——

江 本 裕

一 延宝七年の西鶴

延宝七年（一六七九）、西鶴三十八歳。この年も歳旦三物集『春枕』があつたというが未詳^{注(1)}。正月二十一日には東下する井筒公木（在江戸か、延宝七年刊田代松意撰『林談 功用群鑑』に「麻布住／公木」を関送りして間に合わず、青木友雪・和氣遠舟・釈正察と四吟百韻を営んで、『俳諧四吟六日飛脚』と題して上梓した。三月六日から八日にかけては摂津鴻池村山本西、六亭にて、松井西、花・水田西、吟・山本西、友（傍点筆者、以下同じ）と五吟五百韻を興行、『西鶴五百韻』と銘うって刊行した。本書は元題簽剥落のため原題を確認することできぬが、前々年刊行の『俳諧大句教』の角書に「西鶴」（ただし「西」は剥落↓天理図書館編『西鶴』を刻しているのだから、連衆からみて「西鶴」を前面に出すことは大いにあり得た。

四月十四日には青木友雪と『両吟一日千句』（五月刊）を興行、七月には尾張鳴海の下里勘兵衛知足が有馬入湯の帰途西鶴庵を訪れ、知足を正客に木村一水と齋藤賀子も加わって半歌仙が巻かれ^{注(2)}、八月には仙台出身の木村一水が主催する『句箱』の興行に出座。右は一水が大阪の歌舞伎役者を招いて催したものが現在は勝峰晋風の西鶴関係手抄が残るのみである（若干後述）。

同じく八月には、同年三月仙台の大淀三千風が興行した『仙台大矢数』に、跋文と独吟の歌仙を与え、斡旋して大阪深江屋から版行。この出版に西鶴が労をとったこと間違いないく、その跋文に「紀子千八百はいざしら波の跡かたもなき事ぞかし」、「高政などの口拍子にては大俳諧は及ぶ事にてあらず」など書いている処からすれば、援助は三千風への親切心からだけではなかったらしい。困惑狼狽した三千風が「愚老大矢数の奥書を見待りて、こは浅ましとて足摺をしけれど、はや難波の板船に帆をあげぬときよて、高政・紀子両翁へ、予が心の外なればゆるしてたうびよと、いひにげのせうそしつて、おくに、おもひきや我松嶋の月ならで浮世の浪に身をよせんとは」(『松嶋眺望集』)と弁解これつとめるおまけがつくのだが、西鶴の腹に一物あったこと間違いない処だろう。というのは、いざれ詳しく考えねばならぬと思つてゐるのだが、この年三月二十二日付の下里勘兵衛宛の書簡に、「今こそ江戸も京も私のぞみの俳諧_ニ仕申候 是神力とよるこび申候」と満足しながらも、「我等千六百仕申候後_ニ 紀子と申者千八百作物_ニ仕申候 内証存ながら 高政が点おかしく候」と、同じく紀子と高政を難じ、さらに「近々_ニ一日一夜三千句のぞみ_ニ御座候」と、多分翌八年の『西鶴大矢数』の興行を指すであろう計画を披瀝しているからである。如上は『大矢数』の跋文にも通じるのであるが、これらは単なる紀子・高政への個人攻撃にとどまらず、この年から騒然となる貞門・談林間の論争と決して無関係ではないように思われる。西鶴の一種の苛立ちを示すものと一応ここでは記しておく。

さて、十月八日には大阪天満宮の神前で一日千句を興行、『飛梅千句』と題して刊行した。連衆は西鶴のほかに西波・西花・西長・賀子・西里・西伊・西虎・仁交・友雪・満平(来山)・一鶴・西雪・西吟(執筆と追加脇)の十四名。十一月七日には江戸の小西似春を迎えての松門亭(片岡旨恕)での百韻興行に出席(同年十二月難波津散人_八旨恕_ノ自序の『わたし船』巻頭に「伊勢何」で収まる)、連衆は似春・旨恕・益翁・梅翁・本秋・益友・夕鳥・宗先・政寛・惟中・西鶴・保友の十二名。同書には他に四巻の百韻が収まるが西鶴は巻尾の「何払」にも出席。連衆は梅翁・西虎・京江雲・旨恕・西鶴・亦葉・惟中の七名であった。

以上くだくだしくたどったが、西鶴は一方では門下としげく会しながら、他方では師宗因をはじめ、大阪の著名俳人あるいは梨園の俳士、また江戸その他自己圏外の俳士との交流をも深め、勢力拡大につとめているのである。そしてそんな中で、第二の付合集、『二葉集』が編集刊行されたのだった。

二 二葉集細目と巻頭の西鶴

『二葉集』は横本一冊（二冊本もあったか）、「延宝七年霜月十一日／勢州杉村西治」の序、「延宝七年／未九月吉日／大坂伏見呉服町書林／深江屋太郎兵衛板」。序者は西治だが、題簽角書に「俳諧新附合／物種集追加」とあることや後述の様々な事由から、西鶴の編になること確実である。ただし版元は『物種集』が大坂南本町一丁目の生野屋六良兵衛であったのに対し本書は深江屋である。深江屋からの西鶴編著は本書が初めてであるが、本年に入ると急に密で、『西鶴五百韻』（三月刊）、中村西国の『花見教寄』（四月刊）、『両吟一日千句』（五月刊）、『仙台大矢数』（八月刊）、『飛梅千句』（十月刊）と、自著や関連深い書をすべて深江屋から出している。

本書も版下は水田西吟、収録する付合は千組（物種集は五百組）、入集者の数も『物種集』の一六五名（うち一人は説人不知）から二六五名へと、百名ふえている。序者の杉村西治は「勢州」とするが詳細不明、管見の範囲本書に十三組入る以外では、『大矢数』（44の3）に名を見るのみである。本書には既に米谷 巖・檀上正孝氏編「物種集・二葉集作者索引」（『近世文芸稿』9、昭和39・2）や大谷篤藏氏編「俳諧新付合物種集追加二葉集索引」（『女子大國文』18、昭和41・11）、更には『物種集』『二葉』に重複して入るを示す資料（古典俳文学大系・談林俳諧集一所収の二葉集）も備っているのだが、上記を参照しつつ、以下に若干の考察を試みる。

そこで、まず注目すべきは、巻頭の付合だろう。

かねの鎖のながき君が代

臣は水日本一のあたけ丸 井原
西鶴

右がそれであるが、該書に到って、西鶴は初めて自身の作で巻頭を飾った。念のため記せば巻尾は津田休甫である。処女編著の『生玉万句』（これも巻頭守武、追加第三に西翁が座るが）はさておき、次の『哥仙 大坂俳諧師』以来、本書を除いて己の編著で師宗因を巻頭か巻尾に配さないのはなかった（ただし大坂歳旦には入集せず。また圧倒的に巻頭が多く、巻尾は古今誹諧師手鑑のみ）。むろん前年刊の『物種集』も宗因が巻頭にいた。入集数こそ六十三組で宗因が第一位だが、『二葉集』におけるこの措置は、形の上できわめて異例といえた。

しかも句意である。付句の「臣は水」は「君は船臣は水、水よく船を浮かぶ」（荀子・哀公篇↓謡曲内外詣・毛吹草等）で前句に付き、御代の長久を祝って巻頭を飾るにふさわしくはなっている。しかし問題は「日本一のあたけ丸」と続ける場合である。「安宅丸」は三代將軍家光が寛永九年（一六三二）に向井將監に造らせた超大型軍船形式の御座船で、推定排水量千五百トン、船首に長さ三間の竜頭を付け船上に二重の天守を構えて華麗を極めたが実用性に乏しく、天和二年（一六八二）、五代綱吉の命で解体されたという（吉川弘文館国史大辞典）。『御当代記』はこの解体の事態を、「当代御たたませ被成候御心、諸人不審仕」（天和二年秋）とするのであるが、むろん延宝七年の時点では名声を保っており、庶民レベルで言えば「あたけ丸」として日本一の御舟（東海道名所記・一）でなければ句が意味をなさぬことになる。

さてそこで問題は「日本一」の係り受けである。素直には「日本一のあたけ丸」であるが、同時に「日本一」は「臣は水」をも受け、つまりは「臣（水）」が「日本一」ともなる。そこでこの「君」を師、「臣」を弟子と解したらどうなるだろう。弟子が師をよく浮かばせることになる。付会にすぎないかもしれないが、どうも単純に御代長久を祝うとのみは受けとれない。しかも本書の巻頭部分は、井原西鶴、夕陽庵道寸、松山政也、西山梅翁、積 西海、前川由平、大淀友翰（三千風）、南元順と並び、巻尾は高滝益翁、高石石齋、那波江雲、西山梅翁、荒木田守武、山崎宗鑑と進み、津田休甫で終っ

ていた（因みに記すと物種集は梅翁・玖也・保友・元順・西鶴・遠舟の順で始まり、西鬼・貞室・保友・正甫・読人不知で終る）。俳歴からみて西鶴が破格で、巻尾に整合性なきにしもあらずとは言ひ、宗因が落着かない。なぜこういう形となったのか。この年に始まる京阪の談林の主導権争いの余波か、西鶴の宗因離れを示すのか。はつきりしたことは言えぬが重要な問題が含まれているといえよう。しかして、西鶴が影の編者を置くのは本書が最初であるが、西治を表に出さざるを得なかった理由も、この辺にあつたのではなからうか。

三 新旧交代

次に『二葉集』に五組以上入る者を、上位からあげてみる。二六五名中五十八名。下に（ ）で示すのは『物種集』への入集数である。

63 (4) 西山梅翁	54 (9) 井原西鶴	37 (4) 和氣遠舟	28 (0) 青木友雪	23 (18) 梶山保友	23 (17) 南元順	20 (8) 高滝益翁
16 (3) 中村西国	14 (19) 松山玖也	14 (7) 齋藤賀子	13 (5) 水田西吟	13 (0) 杉村西治	12 (4) 前川由平	12 (0) 奥村林雪
12 (3) 岩井武仙	11 (5) 釈西海	11 (0) 松嶺軒西波	10 (6) 岩田西里	10 (0) 松井悦重	10 (3) 谷木因	9 (0) 中村鶴道
9 (0) 榎並宗全	9 (2) 南部素敬	9 (2) 山田西長	8 (0) 江戸不卜	8 (5) 中堀幾音	8 (0) 沢井梅朝	7 (8) 中林素玄
7 (0) 京千春	7 (1) 山本西夕	7 (6) 柏一礼	7 (0) 江戸笑吟	7 (0) 片岡旨恕	7 (7) 牧野西鬼	7 (1) 市村松鶴
6 (5) 釈西海	6 (0) 江戸幽山	6 (4) 川野定俊	6 (5) 光吉定祐	6 (1) 井口如貞	6 (1) 山中西六	6 (2) 水守重直
6 (14) 大須賀胤久	6 (1) 松井西花	6 (0) 江戸卜尺	6 (5) 吉田川柳	6 (0) 井筒公木	5 (7) 藤原貞因	5 (0) 秋津守由
5 (0) 正木西愚	5 (0) 藤原柳海	5 (0) 江戸泰徳	5 (0) 家利可尋	5 (4) 樋口如見	5 (0) 古川自次	5 (2) 浄照坊昨夢
5 (4) 木村西虎	5 (0) 江戸仙風					

因みに記せば、『物種集』では梅翁・西鶴・玖也・保友・元順・胤久・益翁・素玄の順。『二葉集』で玖也が後退するのは延宝四年に没しているためである。本書でも益翁あたりまでの順位には大差なく（胤久は物種で特例）、大阪を代表する

顔には敬意を表していることになろう。なお記せば、収録数が倍増するに對し員数は百の増加なのだから、二書同程度なら後者の数が軽いことになる。気付いたことから記していくと、中堀幾音（8組）、中林素玄（7）、柏 一礼（同）、牧野西鬼（同）などは『生玉万句』以来の同志ながら入集数殆ど変わらず、相対的には軽くなっていることである（独吟一日千句初出の光吉定祐、大坂歳旦の吉田川柳もしかり）。彼等より古い藤原貞因（5組）、樋口如見（同）も井口如貞（6）を除けば同じである。

そんななかで、和氣遠舟（4↓37）と青木友雪（0↓28）の飛躍的優遇がまず特記されよう。遠舟との近しさについてはこれまで縷々述べてきた処。友雪は『生玉万句』で「青木藤兵衛友浄」として執筆をつとめて以来の交流もあるが、この年四月の『両吟一日千句』など近くに來ての親交が与っているとと思われる。ついで齋藤賀子（7↓14）、前川由平（4↓12）、岩井武仙（3↓12）が目立つ。つまりはこの時点での親疎の差をみごとに反映しているのである。眼を直系に転ずると西鶴の意図を更に露骨に読みとることができる。中村西国（3↓16）、水田西吟（5↓13）以下、「西」を号に付す者をたどると（市村松鶴も）、釈 西海と木村西虎を例外に、軒並み大幅な伸張を遂げているのである（杉村西治は編者としての功だろう）。中には衣笠一鶴（7↓4）のごとき例外もあったが、概して言えば、北峯正甫（7↓4）、井上宗恭（5↓4）、西岸寺住口（5↓1）などの古俳が割をくっていた。

しかして右の事実は、「万よし世の中に、俳諧の附合物種をまかれし田蓑の蘊のあし跡を、したひて、」^{よう}「姿言葉のかはりたる一作」を、「今あらためて新田をひら」くという『二葉集』序文の主旨に即すれば、あるいは当然のなりゆきだと言えるのかもしれない。しかし実はこの序文そのものが曲者で、確かに多くの新人を含んではいるものの、言ってみれば自己周辺の者を入れこむカムフラージュの役割も充分に担っていた。例えば『物種集』と『二葉集』に同一の付合が重出する者が八十四名いるが、その中にはわずか一組か二組の入集で、それが全く同一の者が十七名いる（一組15名、2組2名）。試みにそれを示せば次の通り。

伊丹一勝 多羅尾西也 山崎間楽 川辺長治 山川吉勝 半井一六 仁和寺有年 岡田悦春 高木松意
寺田時久 多古夕風 西田久任 白江醉鶯 山崎梵益 禁野蒲劍 浅沼賛也 平野未成(一六と賛也が二組)

右には現役の高木松意や西鶴の版下を書く浅沼賛也がいて一概には言えぬが、しかし『哥仙 大坂俳諧師』に入る半井一六、岡田悦春・西田久任・白江醉鶯、また山崎間楽や川辺長治、山崎梵益・禁野蒲劍など、古参ないしそれに近い者が多いことはまちがいない事実であった。彼等はまさしく遠舟や友雪、西国や西吟等と対照的に遇されている。『生玉万句』に出句した平野の生松勝政が『物種』に一組『二葉』に二組入りその一つが重複すること、『哥仙』に入る古俳片山秋月の『物種』二『二葉』一でその一の重複、『生玉』に出句する泉州尾崎の吉田尾蠅が『物種』三『二葉』に二でその二組が重なる事実を加えれば、編者が彼等をどう遇したかは更にはつきりしよう。『二葉集』における西鶴は、自己周辺並びに親疎の程度で、扱いを一段と明確に示したのである。

話を前の掲出に戻すと、江戸俳人の進出が目立つがこれは後に譲る。谷 木因(3↓10)、井筒公木(0↓6)のうち、木因は前年急速に親しくなった美濃の俳人(前号参照)。公木は西鶴編著に初めて顔を出す人物であるが、本年正月に閑送りした因みのためだろう。親しむとすぐとりいれるのは西鶴の通例である。大阪の俳人では奥村林雪(0↓12)松井悦重(0↓10)、沢井梅朝(0↓8)、秋津守良(0↓5)、藤原柳海(同)、家利可尋(同)の突然の進出が目立つ(正木西愚も)。彼等がなぜ入ったのかは不明、また精査していないが西鶴編著に限れば、柳海は本書のみ、他は『大矢数』にのみ名を見出す(林雪6・1、悦重は線香見の役と15の3、梅朝40・3、守由40・1、可尋41・1、西愚35・7)。片岡旨恕は熟知の間柄、筑前の古川自次は『大坂歳旦』(引付345)に既に名を見、『大矢数』(17・1)にも出句する人物である。

さて、既述したように自己周辺優遇の目立つ『二葉集』ではあるが、むろん西鶴の眼は、大阪以外にも向けられていた。それは『物種集』よりも更に拡大、奥州の南部から九州まで、九十名を越すと考えられる。堺（既出2名、新出9名）、伊丹・池田（既出4、新出5）、中国筋（既出3、新出4）、九州（既出3、新出3）などが主であるが、なんといつても特筆すべきは、江戸からの大量入集である。しかもその中には、前章の一覧にもあつたように、不卜（8）、笑吟（7）、幽山（6）卜尺（同）、泰徳（5）、仙風（同）など、他に比し入集数の多い者も多くいた。そして右は、『物種集』に山口信章と門村兼豊が「江戸」を冠して各二組しか入っていないのに比べて、大きな違いである。もっとも「江戸」を冠せずに柏木源五一が入っており、本『二葉集』の場合も田代松意（2組）、釈才丸（1）には「江戸」が冠せられていない。従つて厳密さに欠ける憾みはあるが、便宜「江戸」を冠する三十七名に限つて、この入集が西鶴にとつていかなる意味を持つのか検討してみたい。山口信章や谷木因、また井筒公木や仙台の大淀友翰・木村一水（後二者は本書が西鶴編著では初見）がそうであるように、入る直前にはなんらかの因縁があると考えられるからである。

次頁に示す表は「江戸」を冠して出る江戸俳人を、入集数の多い順に並べたものである。本書は松尾桃青が初めて西鶴の視野に入ったことでも注目されるのだがそれ以上に驚くことは、繰返しになるがその数の多さである。前年の『物種集』で信章と兼豊しか入れなかつた西鶴が、なぜ一挙に三十七名も採つたのか。またどういうルートで知り得た者を入れたのか。表の「西鶴編著」の欄に書きこみのできる者、即ち一柳軒岡村不卜、丁々軒高野幽山、松尾桃青、紫藤軒池西言水、門村法橋兼豊、福田露言、小西似春（この年同席）、壺瓢軒岸本調和、神田蝶々子（磐城城主内藤露沾も）など一家をなしている俳人については、信章の上京（延宝二年秋から翌年春）や前年の田代松意との会席（虎溪の橋）を通じて、ま

二葉集所収江戸俳人一覧

如流	敲泉	智風	笑詠	露沾	露言	兼豊	流也	言水	笑受	桃青	信章	仙風	泰徳	卜尺	幽山	笑吟	不卜	人名
2	2	2	2	2	2	2	3	3	4	4	4	5	5	6	6	7	8	二葉集 西鶴編著
					三津・高名・名残友	古今・三津・高名(物種)		三津・高名・名残友		三津・高名・名残友	大矢(物種)				三津・高名		大矢・三津・高名	当世
2 (1)										6 (3)	1 (0)	4 (1)	35 (11)	11 (7)	12 (9)		6 (5)	通町
		1 (0) 風		2 (0)	1 (0)		4 (1)			10 (5)			9 (1)	2 (2)			3 (2)	新道
4				7	3	1	1	10		3	6 来雪		4	2	9		1	広小路
2 (0)	6 (6)	11 (6) 風		2 (0)	35 (14)	20 (11)	18 (9)	17 (9)		37 (20)	7 (0)	20 (16)	26 (13)	33 (18)	50 (27)		31 (19)	富石
2					48	7	2	3			2 来雪		4		7		5	蛇醉
	1			12	3		1	39		3	1 来雪	4	8		10		2	坂東
5			1	17	34	1		27		4					14			誹枕
21 怒流				17	7	1		10			16 素堂	1	8		108		4	向岡
			7	15	7	8		4		9	3		6	2	5	2	48	弁慶
				9	9	1		32			1		4		7			東日
				8	3	3		38		15	2 素堂		4		6		2	

西鶴

合計 入集者	宗真	心色	随所	蝶々子	重吉	可青	山夕	調泉子	露耳	愚候	卜吟	青雲	卜円	調和	酉水	卜由	寸夕	露夕	似春	人名	
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	2	2	二 入集 数葉
				古今・三津・高名										古今・三津・高名					三津・高名	西鶴編著	
12				49 (34)								8 (6)		1 (0)					6 (5)	当世	
15				35 (13)		2 (0)		5 (0)			3 (1)	5 (5)			4 (0)				1 (0)	通町	
21		5		1		1	3	1				3		3				1	6	新道	
33	3 (2)	11 (6)	4 (2)	14 (5)	3 (1)	2 (1)	3 (1)	29 (9)		2 (2)	2 (2)	6 (1)	3 (2)	32 (19)	11 (3)	4 (3)	19 (9)	6 (4)	30 (12)	広小路	
17			1	12			7	40		5				70				3	8	富石	
17		4			2			8				2		1						4	蛇酢
13							7	23				1		48				1		坂東	
16		5		5				1				13		5						2	誹枕
18				21			9	1				3		5						9	向岡
14		7					9	13				1		6				1		3	弁慶
13		6					6							3						3	東日

注 表の数字の()内は総数の内に占める付合の数を示す

略記説明

西鶴編著

古今—古今俳諧師手鑑、延宝四年十月自序、246句入集。

大矢—西鶴大矢数、延宝八年五月興行、総勢720名。

三津—俳諧三ヶ津、天和二年二月序、36名入集。

高名—高名集、天和二年三月序、66名入集。

名残友—西鶴名残の友、元禄十二年刊。

俳書

当世—俳諧当世男、二冊。延宝四年神田蝶々子自序(撰)。発句333、付合246、作者187名。古典俳文学大系、談林俳諧集一に拠る。

通町—俳諧江戸通り町、二冊。延宝六年七月刊。二葉子撰とするが実際は父蝶々子撰。発句270、付合87、作者168名。古典俳文学大系、談林俳話集二に拠る。

新道—江戸新道、一冊。延宝六年八月奥書、紫藤軒言水撰。発句215、作者112名。俳諧文庫、芭蕉以前俳諧集一に拠る。

広小路—江戸広小路、二冊。延宝六年一柳軒不卜序(撰)。発句413、付合305、作者140名。古典俳文学大系、談林俳諧集一に拠る。

富石—富士石、四冊。延宝七年四月壺醉軒與也序、壺瓢軒調和撰。発句一八四、作者308名(卷末句引)。近世文学資料類従、古俳諧集34に拠る。

蛇醉—俳諧江戸蛇之醉、一冊。延宝七年五月奥書、紫藤軒言水撰。発句329、作者124名。古典俳文学大系、談林俳諧集一に拠る。

坂東—俳諧坂東太郎、二冊。延宝七年十二月言水序、一切経堂才丸撰。発句779、作者156(桜井武次郎氏日本古典文学大辞典)であるが、便宜句引(730・132)に拠る。古典俳文学大系、談林俳諧集二。

誹枕—誹枕、四冊。延宝八年素堂序、高野幽山撰。発句844、作者232名。日本俳書大系、談林俳諧集一に拠る。

向之岡—俳諧向之岡、三冊か(現存二冊)。一柳軒不卜序(撰)。延宝八年成発句二次、作者215名。上巻は岡田彰子氏の翻刻(大阪青山短大国文2号、昭和61・2)に、中巻は学習院大学国文研究所蔵本に拠る。

弁慶—俳諧江戸弁慶、上巻一冊のみ伝存。延宝八年刊ならん。池西言水撰。発句678、作者233名。俳諧文庫、芭蕉以前俳諧集一に拠る。

東日—俳諧東日記、二冊。延宝九年夏、繁特小僧才麿序(撰)。発句800、作者269名。古典俳文学大系、談林俳諧集一に拠る。

なお、智風は通町、広小路とも智鳳、誹枕で如流は板花怒流(富士石等で板花勾当如流)、信章に関しては新道、富士石等が来雪、誹枕と東日が素堂とする。

たそんな交流がなくても、知り得たかもしれない。しかしその他のさほど名が通っていたとは思われぬ者を、西鶴が注視

していたとは思われないのである。そこでとりあえず、江戸の俳壇が活気を帯び始める延宝中頃から末期にかけて出され

た江戸の撰集への三十七名の入集状況を、表の下部に示してみた。一覽しただけで、不ト・幽山・桃青・言水・兼豊など

の処に空欄の少ないことに気付く。西鶴の後年の『三ヶ津』や『高名集』での選択の基準が、江戸に関しては案内中庸を得ていたことに気付くのであるが、空白の目立つ俳人、寸夕やト由や可青・重吉・宗真等々を、彼はどのようにして知り得たのだろうか。

まず考えられるのが西丸である。西丸は大和国宇陀の生まれ、山本西武門から『古今誹諧師手鑑』(延宝四年刊)に、南都谷松笠軒西丸^{注③}で入る頃には西鶴門に転じていたされ、同五年頃には東下、早くも延宝七年(師走下旬言水序)^{注④}には、「撰者一切経堂才丸」の名で、『誹坂東太郎』を公刊していた。時に二十四歳。岸本調和の後援あつたかとされる通り調和の四十八句入集が最高で(表参照)、かつ号に「調」の付く入集者も二十七名を数える。しかしまた同時に、武州羽生を中心に、丸石・丸露・鉄丸・丸之・重丸・西望・西勝・西調・西嶺・西童・西友・西和・西石・西詠といった、一見直門と考えられる層をも形成していて、台頭が著しいのである。だが、表から分るように、『坂東太郎』から『二葉集』に入集する者は十三名と意外に少なく、目を惹くのは笑詠(1句)、如流(5)、露夕(1)、青雲(1)程度、入集者数と収録句数からみて、才丸から西鶴へのルートは考えられないだろう。またこの時期活躍めざましい池面言水(江戸新道、江戸蛇之醉・江戸弁慶・東日記)もほぼ同じで、新進若手との結びつきは認められない。

逆に最も関連濃密なのが岡村不卜の『江戸広小路』である。まず『広小路』には三十七名中笑吟・笑受・笑詠・露耳の四名を除く三十三名が入っていてその数は断然他を圧している(37名のうち笑受と露耳は掲載の俳書を見ることができず、御教示いただければ幸いである)。次に、この『広小路』の撰者不卜が、江戸では最高の八句を得ている。更に該書の欄を横に見ていくと、幽山の五十句は措くとして、ト尺(小沢氏)三十三、泰徳(西岡氏)二十六、仙風(杉山氏、杉風の父)二十と、『二葉集』に採られる者が続出、かつその入集句数が他に比して圧倒的に多い(撰集自体の収録数も多いが)。なお付け加えると、ト由・ト円・ト吟・寸夕・愚候(富士石に金田愚候)・可青・重吉・随所(富士石に深町随所)・宗真と、他では空白の多い俳人が輩出している。上記のうちト由・ト円・ト吟は不卜直系と考えてよい^{注⑤}か。また寸夕・ト由・

ト卜・宗真の四名は該書にのみ載る。二年後の同人撰『向之岡』になると十八名に減少し、七組採られ第二位にある笑吟が載らぬなど気になる処もあるが(ただし向之岡には2句入集。笑詠も7句入る)、ともかくここでは『広小路』が最も密であることを認めよう。

そして、ここで思い出されるのが檀上正孝氏の「芭蕉論序説」の詳細的確な江戸俳壇分析である。^{註6)}氏は上稿で延宝期の江戸俳壇を大きく四つのグループに分けられ(江戸はえぬき派、談林派、風虎・露沾派、東下京都俳人派)、その第一のはえぬき派を調和系、不卜系、蝶々子系に、風虎・露沾派を幽山・如流・泰徳系、似春・信章・桃青系、言水・才丸系に、それぞれ細分されている。そして第一のうちの不卜系は、延宝中期以後、第三の風虎・露沾派の似春・信章・桃青系に急速接近するとされるのだが、右の教示に従って表示の『広小路』と『向之岡』を見ると、信章・桃青・露沾・似春の入集数が他に比し確かに多いことに気付くのである(ただし広小路の露沾、向之岡の信章は少ない。信章は誹枕を除くと概して少ない)。なお付け加えると檀上氏は、第二グループの談林派、『談林十百韻』(延宝二年刊)に参加した田代松意・野口在色等九名のうち、三輪一鉄・正友・卜尺は、のち風虎・露沾派に転じたとされる。

いま筆者の念頭にあるのは前述『物種集』に入る山口信章の存在である。前回記したが彼は延宝二年の秋から翌三年春にかけて上京滞在し、西鶴との交渉は確認できぬものの片岡旨恕とは同席して歌仙を巻いていた(旨恕撰『草枕』八推定延宝四年刊√所収)。三年五月には東下の宗因を迎えてもいる。翻って貞享五年三月自序の不卜撰『統の原』(二冊)を見ると、「四季句合」(各12番、秋のみ11番)の春と冬は素堂(信章)と桃青が判者をつとめており、不卜は一門を引き連れ、蕉門からも拳白・仙花・破笠・去来・野馬・其角・嵐雪等が参加。巻頭春の句合の素堂判詞には、「古き世の友、不卜子、十余ふた番の句合を袖にし来て判をもとむ」と記している。西鶴が『広小路』を見たなどと言うつもりは毛頭ないが、信章を介しての情報収集が考えられないだろうか。いま一つ、表の「西鶴編著」の処を見ていただきたいが、西鶴の『大矢数』興行に際して句を送っているのが不卜と信章だけであるという事実がある(他に「松意」があり、田代松意の可

能性なくはないが大坂の高木松意(注⁷)。不ト五十五の五、信章四十二の三であるからとも四千句の第四十までには入らず、残余の表八句に名を連ねるだけであるが、しかし江戸から二人だけが送っていることは注目される。以上ともかくここでは、江戸三十七名中不トの付合が『二葉集』に最も多く入集し、その『二葉集』に入る三十七名は彼の撰になる『江戸広小路』にとびぬけて多く重なること、『大矢数』への出句から西鶴と不トにある繋りを感じ得ること、また西鶴の情報収集には山口信章を介した可能性のあることを記しておきたい。

さて、再び表に眼を転ずると、『二葉集』入集数上位者の江戸俳書への入集が、年が新しくなるにつれて減少していくことに気付く。これはどう考えるべきなのか。いささか煩わしくなるが、やや視点を変えて、『二葉集』編集の延宝七年を目処に、江戸俳壇の状況をうかがってみる。延宝六年に言水の処女編著『江戸新道』が出、不トも『江戸広小路』を刊行、翌七年五月には言水の第二撰著『江戸蛇之醉』が出る。同年十二月序のある才丸撰『坂東太郎』刊行についても師である西鶴は知っていたかもしれぬが、ここでは一応、『当世男』から『蛇之醉』までの上位入集者を抽出してみる。

○当世男(蝶々子撰)

蝶々子、49(34)

泰徳、35(11)

宗伴、33(8)

大阪宗因、16(4)

十歳政陳、15(2)

酒云、14(5)

書林、11(3)

ト、尺、11(7)

見石、11(5)

在色、10(7)

七歳億丸、9(0)

重秀、9(0)

青雲、8(6)

○通り町(二葉子↓蝶々子撰)

蝶々子、35(13)

二葉子、21(7)

和石、13(6)

桃、青、10(5)

善古、9(3)

泰徳、9(1)

紀子、8(5)

信風、6(1)

億丸、6(1)

青雲、5(5)

調泉、5(0)

黄鳥子、5(0)

調味、5(0)

流也、4(1)

酉水、4(0)

玄素、4(3)

一省、4(0)

白糸氏、4(2)

○新道(言水撰)

言水、10

幽山、9

露沾、7

似春、6

(信章)
来雪、6

心色、5

一鉄、5

楞木、4

泰徳、4

如流、4

昨雲、4

友夕、4

云奴、4

在色、4

○広小路（不ト撰）

幽山 50 (㊳)	桃青 37 (㊳)	露言 35 (㊳)	卜尺 33 (㊳)	調和 32 (㊳)	不ト 31 (㊳)	似春 30 (㊳)	調泉子 29 (9)	泰徳 26 (㊳)
兼豊 20 (㊳)	仙風 20 (㊳)	寸夕 19 (9)	流也 18 (9)	言水 17 (9)	蝶々子 14 (5)	酉水 11 (3)	心色 11 (6)	智鳳 11 (6)

○蛇之酔（言水撰）

言水 39	露沾 12	調古 11	幽山 10	風虎 10	泰徳 8	調加 8	茶瓢軒 8 <small>(調泉)</small>	安昌 7
如蛙 7	如流 5	泰清 5	幸順 5	一鉄 5 (数字中()内は総数のうちの付合の数を示す)				

右を見て、『広小路』に重なる者の多いことは当然ながら、入集数のでも上位者の多いことが分る。次に言水撰に、露沾・似春・幽山の句数が多いこと。更には、不トと言水撰で、幽山の句の多いことである。さて『二葉集』上位入集者の方だが、まず、泰徳（五組）がすべてに顔を出す。ついで、卜尺（6組）、青雲（1）、桃青（4）、流也（4）、酉水（2）、信章（4）、心色（2）、如流（2）、調泉（1）などが、少数入集者も含めてだが、ほぼ見合った形で出ていることに気付く。そこで『二葉集』にも六組入り（三位）言水・不トにも優遇されている幽山に注目してみる。

高野幽山は松江重頼門、檀上氏前掲「芭蕉論序説」では第三グループの風虎・露沾派の三つの系統のうち、いま揭示した上位入集者泰徳・如流系を率いていた。また揭示に名のある青雲は幽山門で、『誹家大系図』は幽山門にあげながら、「松木氏、通称詳ならず、松木政則男ト云、或云、宗因之門下ニシテ幽山ノ友ナリトモ」(当世男は酒井氏とする)と記す。『寛文比俳諧宗匠并素人名誉人』が「幽山三物連中」にあげるの(注6)で、幽山門と考えてよからう。そして、宗因が東下した折、芭蕉たちは彼を迎えて、江戸本所の大徳院で、「いと涼しき大徳也けり法の水」の宗因句を発句に、百韻興行を催したのであった。集うた連衆は席主の大徳院住職の礎図をはじめ、幽山・桃青・信章・木也・吟市・少才・似春の八名(それに執筆)。ここに幽山と信章・桃青派の交流を見るのだが、なお似春と幽山は宗因帰阪を鎌倉まで慕い、「鎌倉三吟」(百韻)をものしていた(『宗因七百韻』所収)。

延宝五年成立の内藤風虎主催『六百番誹諧発句合』の諸国の作者六十名の中にも、幽山・似春・露沾・言水・信章・如流・泰徳・桃青の八名を認めることができる。^{注9)}更に同六年三月に刊行された幽山編の『江戸八百韻』には、来雪（信章）・青雲・言水・如流・泰徳（他は一鉄と安昌）が参加していた。よってここに幽山系と信章・桃青系の接近をも確認することができ、ここにも信章が深くかかわっているのである。言水・才丸系の言水はどうなるかといえ、彼が幽山に寄り沿う形で登場すること（^{注10)}これまた檀上氏に指摘あり）（前掲言水撰への入集数からでも分る。対するに才丸は先述のごとく調和寄りで、調和は二葉集に一組しか入っていない）、ここでは幽山側と考えて差支えない。

西鶴が江戸を多く採ったのは江戸俳壇の活気を看取したせいだと思ふ。江戸は言水・才丸の登場によって革新の風生じ、それが間もなく桃青一派にとってかわられる由だが、^{注11)}確かに『江戸新道』（延宝六年）から『江戸蛇之酔』（同七年）、『江戸弁慶』（同八年と推定）、『東日記』（同九年）までの言水の活躍はめざましく、『新道』の時二十九の若さだった。先述のごとく才丸も『坂東太郎』（延宝七年）の時二十四歳。西鶴にもこの雰囲気は伝わっただろうし、それが彼の眼を江戸に向わしめた。しかし、やはりというか、江戸は遠かった。不卜は万治二年（一六五九）刊の『捨子集』が初見^{注12)}で、大阪俳壇でいえば浜田春良、土橋宗静、生松勝政等、西鶴が本書では概ね冷遇した俳士と同じ頃の人である。泰徳・如流にしても明暦・寛文以来の古俳である由、^{注13)}仙風は杉風の父である。この彼等を優遇しながら、自らの弟子である才丸からは一組採るのみだった。後述伊丹の鬼貫十九歳、鉄幽十八歳を採録したことに徴しても、上方圏とは全く対照的たることが知られるのである。自著に権威を持たせるためとも解されるが、やはり肌で感じる地元とは違ったと考える方が真相に近からう。新しい息吹は感得できそれへの応対も怠らなかつたのだが、掬いあげたのはさほど新しいのではなく（信章・桃青・言水もいるが）、まして未来の先取りなどではなかつた。しかして右の事情は西鶴周辺の状況を考えれば当然とも言え、筆者がないものねだりをしている感なくもないのだが、しかし『二葉集』を一つのトータルとして見る時、バ

ランスを欠く感おえないのである。また西鶴のこの江戸大量採録に、一種の独立意識、宗因離れの意図を見るのだがうがちすぎだろうか。

五 再び周辺に

再度大阪に戻ると、西鶴編著に大阪梨園の俳士が登場するのも本書が初めてであった。既に乾裕幸氏に詳論があるので略述に従うが、^{注44}辰寿(狂言作者富永平兵衛、翌八年刊『道頓堀花みち』の撰者)、定方(立役田中治右衛門)、生重(立役大和屋甚兵衛)、立花(若衆形小嶋妻之丞)、頓悦(若衆形梅津加平次)、重行(若女形小勘太郎次)の六名で、定方と立花が一組、他はすべて二組入集。右のうち辰寿を除く五名が翌年の『大矢数』の興行に参与して彩を添えることになる。乾氏の言われる通りこの因みは当年八月木村一水が催した『句箱』興行への出座によるもので、それが『物種集』にはなく『二葉集』に入る理由である。西鶴のいちはやく利用する抜け目なさの証でもある。またこの方面では遠舟の方が先輩であることも乾氏指摘の通りで、『太夫桜』に「舟」の号を付け多く入集、頓悦が既に早く『遠近集』(寛文六年刊)に二句入ることも指摘されているが、延宝三年八月自序の伊勢村重安撰『糸屑』に「摂津大坂/重行」で一句採られる重行も小勘重行と見てよいだろう。

大阪周辺では伊丹で一勝(1組)、宗旦(4)、一友(1)、百丸(同)、鬼貫(同)、木兵(同)、鉄幽(3)と七名も入るのが目につく(堺からも11名入るが)。右のうち上記三名は『物種集』に既出。新出のうち百丸は「伊丹俳諧中興の祖」(俳諧大辞典)と言われ、森本氏、初見は延宝二年刊松江重頼撰の『大井川集』で、『在岡逸士伝』の著者としても名高い。鬼貫は同六年刊の宗旦編『当流籠抜』が初見と考えられ、上書は宗旦(43歳)、木兵(38歳)、百丸(28歳)、鬼貫(18歳)、鉄幽(17歳)の五吟五百韻を収めたものである。『二葉集』刊行の時鬼貫と鉄幽は実に十九と十八の新鋭であった。

前述江戸とは好対照である。付記すれば鉄幽は元禄二年十月十四日二十八歳で没、翌三年二月に鬼貫が主催した追善懷旧百韻興行に、西鶴は椎本才麿（西丸）、小西来山等とともに出座している。^{注6}

最後に九州を一瞥しておく、西海・西国・自次の他に、新しく博多信興（2組）、大塚西与（4）、博多如雲（2）が入集している。西与は『西鶴名残の友』五―三に「筑後の西与」と出る人で『大矢教』にも出句（18・3）、大内初夫氏『近世九州俳壇史の研究』は、元禄七年刊泥足撰の『其便』入集と久留米住なることを記され、西鶴門と推定されている。信興は西鶴編著では本書のみ、如雲は『大矢教』に「懐紙台」の役で原如雲、第四十の三と百五の八に「如雲」の名を見るが速断できない。信興は『遠近集』に「筑前／信興」で二句入り、『寛文比俳諧宗匠并素人名誉人』には「京屋太良右衛門／筑前博多／信興」とある。寛文十二年成重頼撰の『時勢粧』に「筑前博多／服部信興」で五句入集（句引に拠る）。また如雲も上書に「筑前博多／渋谷如雲」で一句入集。そして近時、棚町知弥氏が「福岡の貞門俳人たち」（その一）と題して、信興と如雲に触れられているのを知った。^{注6} 信興に関しては杉浦正一郎氏写の『時勢粧』稿本とおぼしき写本で版本（古典俳文学大系・貞門俳諧集二）との異同に及ばれ、「中の島服部信興」が「中之島町服部太左衛門、信興」となっていること、信興の句が他に『玉海集追加』（寛文七年）に一句、『統山井』（同上）に二句、『伊勢踊』（同八年）に八句採られていること、また渋谷如雲も『伊勢踊』に六句入集することを指摘されている。なお如雲に関しては大内氏が前記著で延宝六年成撰者未詳の『筑紫琴』に一句入集を記される。

如上からして、この二人は相当の俳歴の持ち主で少なくとも重頼と面識あり、信興は商人と考えてよいだろう。如雲の方は渋谷氏とすれば『大矢教』の原如雲とは別（「懐紙台」等の役も渋谷如雲の俳歴にはふさわしくない）、句の方も別人と解した方がよさそうである。

『二葉集』に名を連ねる二六五名のうち西鶴編著に既出の者一四〇名。初出一二五名。新出者の中には手がかりを得ぬ者もかなりいるのだがまだ精査していず、今回は、更にふえている「西」と「鶴」の号の付く者を左に示すにとどめてお

- (9) 檀上正孝氏「内藤風虎主催句合考并作者索引」に拠る（『近世文芸稿』11号、昭和42・1）。
- (10) 檀上正孝氏「延宝・天和期の江戸俳壇」（『国文学攷』34号、昭和39・6）。
- (11) 注(10)に同じ。
- (12) 荻野清氏「岡村不卜考」（『俳文学叢説』所収）。なお氏は『誹諧玉手箱』（延宝四年五月成）への入集句により不卜上京の事実を指摘されるが時期等詳細は不明とされる。
- (13) 日本古典文学大辞典「江戸八百韻」での越智美登子氏の解説。
- (14) 乾 裕幸氏「俳諧狂言説異聞」（『俳諧師西鶴』所収）。
- (15) 伊丹関係に關しては岡田利兵衛氏『上島鬼貫全集』、野間光辰氏注(1)の書参照。
- (16) 「とびうめ」26号（昭和50・6・25）。